

二〇一九年度

日本近世文学会秋季大会

・大会プログラム

・講演・研究発表要旨

期日 十一月九日(土)・十日(日)・十一日(月)

会場 県立広島大学 サテライトキャンパスひろしま

(五〇一・五〇二 大講義室)

〒730-0051

広島県広島市中区大手町一―五―三

広島県民文化センター 五階

一、出欠の葉書を十月十八日(金)必着でお出しく下さい。欠席の場合も、名簿台帳の資料といたしますので、必ず投函してください。

一、出張依頼状を御入用の方は、職名・提出先及び期間を明記の上、学会事務局(慶應義塾大学)へお申し出ください。

一、大会経費は、参加費千円、懇親会費八千円です。

一、送金は同封の振替用紙(口座番号 〇一三七〇―八一一―〇一九一 口座名「日本近世文学会秋季県立広島大学大会」)で、十月十八日(金)までに振り込みをお願いいたします。なお、振替用紙には、必ず「内訳を御記入」ください。参加費のみの方は、当日会場でも申し受けます。

一、三日目(十一月十一日)の文学実地踏査は、特に専用貸切バス等の用意はいたしません。各自・各グループでお回りにください。

一、同封の振替用紙による年会費の振り込みはできません。年会費の振

込用紙は「近世文藝」の末尾に綴じ込んでいます。

一、宿泊等については、各自、早めにご手配ください。

一、会場受付にて「託児料金補助申請書」を配布いたします。該当する会員の方はお受け取りください。

一、お急ぎの御用は左記へ御連絡ください。

日本近世文学会秋季県立広島大学大会事務局

県立広島大学人間文化学部国際文化学科 高松亮太研究室

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一―一七―七

電話 〇八二―二五一―九九六五(研究室直通)

メールアドレス takamatsu@pu-hiroshima.ac.jp

※会場校の負担軽減のため、大会二日目の会場校による昼食(弁当)の提供はございません。各自ご用意ください。また同様の理由から、不参加者の発表資料送付もおこないません。会員各位のご理解ご諒解をお願いいたします。(事務局)

日本近世文学会秋季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。

さて、二〇一九年度秋季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

二〇一九年九月二十五日

日本近世文学会秋季大会会場代表 高松亮太
日本近世文学会事務局代表 津田眞弓

【会場】 県立広島大学 サテライトキャンパスひろしま

【事務局連絡先】

〒223-8521

神奈川県横浜市港北区日吉四―1―1

慶應義塾大学経済学部 津田眞弓研究室

電話 〇四五―五六六―1282

e-mail info@kinseibungakukai.com

第一日 十一月九日(土)

委員会 (一二・二〇～一三・四〇)

委員会会場 五〇四 中講義室

大会受付 (一三・〇〇)

開会時間 (一四・〇〇)

講演・研究発表会 (一四・二〇～一七・四〇)

講演・研究発表会会場 五〇一・五〇二 大講義室

(講演)

紀行文に見る宮島の大鳥居

県立広島大学宮島学センター特任教授 秋山伸隆

(研究発表)

1 寛政期の清涼殿障子和歌制作―日野資矩の役割を中心に―

静岡県富士山世界遺産センター 田代一葉

2 近世歌風史論序説―十八世紀から十九世紀へ―

お茶の水女子大学 浅田徹

3 AIくずし字解読支援機能付翻刻システムによるくずし字指導の実践と活用提案

立命館大学 赤間亮

4 蕉門と柳営連歌

京都府立大学 母利司朗

懇親会 (一八・三〇～二〇・三〇)

懇親会会場 ANAクラウンプラザホテル広島(三階 大宴会場「オーキッド」) 〒730-0037 広島市中区中町七―10

電話 〇八二―二四一―1111

第二日 十一月十日(日)

大会受付(九・三〇)

研究発表会 午前の部(一〇・〇〇～一二・二〇)

研究発表会会場 五〇一・五〇二 大講義室

5 『薩摩歌妓鑑』の成立と影響―『国言詢音頭』・『五大力恋緘』への影響―

6 平賀源内『根南志具佐』のカツパ図

7 岡田清編『芸州巖島図会』の成立と近世後期広島藩の文事―頼杏坪と近藤芳樹を軸に―

8 町に触れられなかった寛政二年五月出版規制法

昼 休 み (一二・二〇～一三・三〇)

編集委員会会場 五〇三 会議室

研究発表会 午後の部(一三・三〇～一五・五〇)

9 大塩平八郎物実録の展開―『狂乱太平記』の以前と以後―

10 太閤記物実録の展開を辿る―『真書太閤記』から『太閤真蹟記』へ―

11 瀬川采女説話の受容と展開―妻・菊の貞女性と好色性を中心に―

12 清正像の生成と展開―宇佐美定祐『朝鮮征伐記』をめぐって―

閉 会 (一五・五〇)

第三日 十一月十一日(月)

文学実地踏査 各自・各グループでお回りください。

図書展示 ①「日本近世文学会開催記念仕様 企画」(仮)

日時 ②「風雅なMuseumがな山水画展」旧派の逆襲」

①二〇一九年十一月七日(木)～十一月十日(日)

②二〇一九年十月二十四日(木)～十二月十五日(日)

*①②ともに九・三〇～一七・〇〇(入館は一六・三〇まで)。

場所 頼山陽史跡資料館(〒730-0036 広島県広島市中区袋町五一―一五)

*①②ともに会員は十一月七日～十日に限り入館無料。

早稲田大学(院)

九州大学(院)

長崎大学

岡山大学

山本秀樹

晝田 葵

吉田 宰

吉良 史明

山本 秀樹

早稲田大学(院)

北海道大学(院)

大阪大学(院)

防衛大学校

萩原 大地

竹内 洪介

岡部 祐佳

井上 泰至

講演

紀行文に見る宮島の大鳥居

県立広島大学宮島学センター特任教授 秋山伸隆

宮島のシンボルとも言える厳島神社の大鳥居は、明治八年（一八七五）に建立された。平安時代末の平清盛の頃の鳥居を初代とすると、八代目の大鳥居ということになる。

二〇一九年六月から大鳥居の大規模な保存・修理工事が開始されたこともあって、大鳥居に関する講演などを依頼される機会が増えたが、調べてみると、大鳥居に関する史料は必ずしも多くはない。江戸時代になって西日本有数の観光地となった宮島では、名所図会の類も数多く出版されているが、大鳥居に関する情報量はそれほど多くはない。たとえば歴代の大鳥居の構造や規模、柱の材質や塗装の色などの基本的な事柄も、実はよくわからないところが多い。

そこで注目したいのが、中世から近世にかけて宮島を訪れた人々によって書き記された紀行文の存在である。たとえば、鎌倉時代後期の『とはずがたり』に見える「まんくたる波の上に鳥居はるかにそはたち」という記述は、大鳥居が現在と同じように、社殿前方の海中に立っていたことを示す最初の文献である。また、古文書によって弘安九年（一二八六）に建立されたことが確認できる二代目の大鳥居の姿を伝える貴重な史料でもある。

この講演では、中世・近世の宮島に関する記述のある紀行文（文学的要素の有無は問わない）をできるだけ収集して、歴代の大鳥居の姿にできるだけ迫ってみたい。

研究発表

寛政期の清涼殿障子和歌制作

―日野資矩の役割を中心に―

静岡県富士山世界遺産センター 田代一葉

寛政二年、復古様式を推進する光格天皇の強い意向により、裏松固禪の考証に基づいた、平安朝の古制に則った紫宸殿・清涼殿が完成した。

この内裏造営については、建築史や美術史、歴史学の詳細な研究の蓄積があるが、本発表では、今回の造営の修理奉行を務め、障子絵・和歌の制作を取り仕切った日野資矩（宝暦六年生、文政十三年没）の役割について、『寛政新造内裏清涼殿大和絵障子歌』（宮内庁書陵部蔵）や資矩の日記類を手がかりとして、詳しい制作過程をたどり、考察する。資矩は、光格天皇歌壇の中心歌人として活躍し、天明七年の大嘗会屏風和歌を詠進した経験を持つ。固禪の縁者であり、障子絵を担当する絵師土佐光貞とも親しく、歌壇の重要人物である日野資枝を父に持つなど、歌人としての経験や人的繋がりがなどが評価され、今回の抜擢となったと考えられる。題の選定者や詠進者、造営方とも密に連絡を取り合い、完成へと指揮を執った様子が看取される。

本障子制作にあたり、固禪が「最勝四天王院障子和歌」に準拠すべきと指示しており、一間における名所の配置の方法や季節の連続性などへの配慮に共通点が見いだせる。例えば、台盤所では、宇津山・田籠浦・浮島原・富士山・三保と駿河国の歌枕で占められ、初夏から晩夏へと緩やかに移ろっていく。今回の造営は公武が一体となって行われたため、駿河国の歌枕を重視する題の選定には、幕府に対する配慮もあったと考えられる。

近世歌風史論序説

—十八世紀から十九世紀へ—

お茶の水女子大学 浅田 徹

近世歌風史に関する従来のイメージは佐佐木信綱に負っており、古今伝授に圧殺されていた地下歌人達が、おのおの個性を主張し、多様な歌風が展開するに至ったというストーリーを成していた。しかし堂上及び堂上派地下に対する評価の是正により、このイメージは既に失効していると考えられる。

本発表ではまず、富士谷成章と伴林光平による和歌史の時期区分に基づき、室町期から十八世紀末までの歌風は三玉集風として一まとまりに把握されていたこと、また十九世紀には『類題鮎玉集』などに見られる平明な風体へ移行したと理解されていたことを確認する。要するに、近世歌風史の基軸は、優美で靡ろな三玉集風から平明な地下風への移行にあった。

和歌史における十八世紀は、堂上派地下歌壇が爆発的に膨れ上がった時代であり、その時庶幾された歌風モデルは後水尾院歌壇の作品だった。しかし彼ら代表的な公家歌人たちの家集は出版されなかったため、具体的に参照されたのは『新題林和歌集』を代表とする堂上類題集であった。のちに十八世紀の歌風は「新題林風」と呼ばれるようになる。流布の版本で学ぶ大量の歌人層が、時代の歌風を決定していくのである。

しかし十九世紀に入る頃から、「新題林風」は不明瞭で曖昧なものとして歌人たちから排斥されるようになる。平明な地下風は、極端に増えた庶民層歌人達の、日常的な世界に親しいものであった。和歌史はついにそこに着地したのである。

A1くずし字解読支援機能付翻刻システムによるくずし字指導の実践と活用提案

立命館大学 赤間 亮

立命館大学アート・リサーチセンターの古典籍ポータルデータベースは、現在、古典籍のデジタル画像を閲覧するデータベースとしては、世界最大の件数が搭載されている。このデータベースには、従来から、ページ閲覧画面上で直接、翻刻してテキストをアーカイブし、まとめてダウンロードできる仕組が備わっている。昨年までに、この機能を強化し、既翻刻本文については、翻刻作業が途中であっても即座に語彙検索可能で、文脈付き結果が表示できるようにした。さらに、昨年末には、A1によって鍛えられたくずし字解読支援システムを翻刻ウィンドウに追加した。これにより、熟練者でなくとも、くずし字によって表記された古典籍の高速な翻刻作業が可能となった。

さらに、本年、海外の日本学研究グループや大学、あるいは、立命館ARCでの海外の学生・研究者向けワークショップにおいて、本システムを使ったくずし字解読実践を実施した。また、発表者の担当する学部授業では、春学期一セメスターを使い、くずし字解読の実習型授業を行った。本発表では、くずし字教育に本システムが指導ツールとして、きわめて有効であることを、実践結果を踏まえて報告する。そして、大学での近世文学の原本読解の授業、あるいは中等教育におけるくずし字入門授業にとっても有効なツールとして提案したい。

なお、A1システムは、凸版印刷株式会社が担当し、立命館大学ARCがAPIの提供をうけ、指導システムとして開発された。

蕉門と柳宮連歌

京都府立大学 母利 司朗

芭蕉と連歌といえ、『笈の小文』や「世にふるも」一句文懐紙の印象が強く、私たちは無意識に「宗祇」の名前を思い浮かべてしまうほどである。では、芭蕉にとつて、同じ時代の連歌はどう意識されていたのだろうか。『去来抄』や『俳諧問答』の中には、当世の連歌師への言及が見られ、少なくとも芭蕉の門人たちには当世連歌への関心のあつたことが確認できる。

ここに延宝四年正月十一日におこなわれた柳宮連歌の写しがある（母利蔵。卷子本。本紙・縦一六センチ、長さ二百センチ程。森川許六筆か）。末尾には、「正月十二日 弟 菊阿弥 芭蕉先生 机下」という後付があり、芭蕉の門人森川許六がある年の正月十二日に芭蕉に送った連歌巻の写しと見られる。許六の『旅館日記』には、元禄六年正月十一日の江戸城における柳宮連歌の書留もある。柳宮連歌は許六の関心ののであつた。

この写しは、許六が、元禄六年正月十二日、芭蕉より、十五日か十六日に訪れる（彦根藩邸武家長屋）むねを記した手紙を受け取った当日、前日の柳宮連歌に触発され、若い日に写した柳宮連歌に献呈の辞を記し、師芭蕉へのもてなしの品として用意したものだったと推測される（再写の可能性もある）。伊賀の武家社会で長らく過ごし、江戸においても武門との交流をもち、門人に武士の多い芭蕉にとつても、柳宮連歌は身近な同じ時代の連歌の代表であり、関心事だったのでないだろうか。これを前にしての歓談のひとつがあつたのだろう。

『薩摩歌妓鑑』の成立と影響

— 『国言詢音頭』・『五大力恋緘』への影響 —

早稲田大学（院） 晝田 葵

宝暦七年九月初演浄瑠璃『薩摩歌妓鑑』は吉田冠子、近松京鯉、竹田小出雲、近松半二、三好松洛の合作である。本作は、元文二年七月八日に起こつたとされる、「五人斬事件」を扱つた作品であるとされてきた。しかし、これは横山正氏が既に指摘されている通り、誤りである。誤りの生じた理由は、『薩摩歌妓鑑』が上演される度に内容が変化しただためだと考えられる。

『薩摩歌妓鑑』は宝暦七年九月、文化四年六月、文化十三年三月の三度上演されているが、上演される度に主役を除いた登場人物と段名が全く異なっている。本発表では、宝暦七年九月に上演されたものをA、文化四年六月のものをB、文化十三年三月のものをCとし、Aの成立が当時の琉球文物の流行を反映し、Bについては「五大力物」の流行、Cは同時上演された『竜宮連理鐘』がそれぞれ影響したことを指摘する。また、今まで注目されていなかったが、A、Bは他作品に影響を与えている。『義太夫年表』に記載された『外題年鑑』や当時の絵尽し等を見ると、『国言詢音頭』は、Bの影響を受けた可能性がある。さらに、『五大力恋緘』はその内容からAと『置土産今織上布』の要素を採り入れつつ、形成されたと考えられる。

『五大力恋緘』から『略三五大切』や『盟三五大切』など他の『五大力物』への影響は既に指摘されているが、本発表では、『五大力恋緘』の形成に『薩摩歌妓鑑』Aが影響を与えたことを明らかにしたい。

平賀源内『根南志具佐』のカッパ図

九州大学（院） 吉 田 幸

平賀源内『根南志具佐』は、宝暦十三年十一月に江戸で刊行された、五巻五冊からなる戯作である。本書は、同年六月十五日に起きた、女形歌舞伎役者・荻野八重桐の溺死事件を題材にしており、その事件の真相を探ってみるといふ体裁のもと、話は展開していく。その中で、八重桐を地獄へと連れていく重要な役回りとしてカッパ（水虎）が登場する。また各巻には挿絵が備わり、巻五の挿絵としてカッパ図が掲載される。

従来、このカッパ図への言及は中村禎里（『河童の日本史』、日本エディタースクール出版部、一九九六年）を除いてほぼ存せず、『根南志具佐』の読解に際して、カッパ図にはあまり意を用いられてこなかった。

そこで本発表では、これまで看過されてきたカッパ図に着目し、このカッパ図が後藤梨春の本草学書『随観写真』（宝暦七年成、東京国立博物館蔵本）からの転写図であることを指摘する。その上で、『根南志具佐』のカッパ図が、その刊行前年の宝暦十二年に起きたカッパ出現の出来事を踏まえたものであることを明らかにする。さらに、源内の戯作の趣向に関して、従来未指摘であった『根南志具佐』『同後編』の両作品における作品構造上の類似性についても新たに言及する。

本発表によって、源内の戯作成立の背景に本草学者とのつながりが深く関わっていたことがより鮮明になるはずである。

岡田清編『芸州蔽島図会』の成立と近世後期広島藩の文事

—頼杏坪と近藤芳樹を軸に—

長崎大学 吉 良 史 明

岡田清編『芸州蔽島図会』（天保十三年刊、名所図会五巻・宝物図会五巻十冊）に関する一連の研究は、儒学者の頼杏坪・加藤棕廬、国学者の近藤芳樹が関与した事実を指摘するのみにあり、成立から出版に至る経緯を解き明かしていない。

一方、奥付にその名をともしに列ねた杏坪に対して、表向きは円満な間柄であるかに装いつつも、実のところは憤懣やるかたない思いを抱いていた芳樹の胸の内が久保田啓一氏「近藤芳樹の活動拠点としての広島」（『国文学攷』第二百十八号、平成二十五年六月）により明らかにされた。良好な関係を築き得ずにいた両者が『芸州蔽島図会』の編纂にいかに従事したか、検証が求められよう。

本発表においては、まず始めに『芸州蔽島図会』の成立に関して、名所図会五巻は杏坪・棕廬編の地誌『芸藩通志』（文政八年成立、百五十八巻百五十九冊）をもとに編まれたこと、一方の宝物図会五巻は芳樹が天保七年（一八三六）頃に宮島を訪れて様々な人々の助力を得て執筆していたことを示す。次に、名所図会巻一の大鳥居、宝物図会巻二の平家納経の記事は、杏坪に対する芳樹の意趣返しとも取れる内容であることを明らかにする。終わりに、寛政異学の禁を始めとする近世後期の学芸界の状況を勘案して、何故芳樹と杏坪の間に軋轢が生じるに至ったか改めて検討し、藩校における勢力拡大を画策する国学者とそれを阻む儒学者との対立が背景にあることを論じる。

町に触れられなかった寛政二年五月出版規制法

岡山大学 山本秀樹

『御触書天保集成』所載寛政二年五月出版規制町触は、寛政三年の山東京伝・蔦屋重三郎等処罰の前提状況の一つとしてこの処罰に関する研究では常に考慮に入れられてきた法令だが、今日に残る江戸町触記録の集成である『江戸町触集成』には載っていないし、江戸書物問屋仲間の文書『三組書物問屋諸規定』にも見えない。同年十一月に触れられた町触（貸本屋等にも新板物出版手続きを命じた法令）は『江戸町触集成』『三組書物問屋諸規定』共に記録されるにもかかわらずである。

このことについて既に私は『江戸時代三都出版法大概』（岡山大学文学部、平成二十二年一月）に記して寛政二年五月町触の発令を疑問視したが、本発表においてはその町触はなされなかったという解釈をさらに確かなものにした。『御触書天保集成』の編集の实情はその町触部分の基礎資料を作成した南町奉行所撰要方の記録『撰要用留』によってうかがうことができるが、その編集は町年寄の町触集の提供も得て行われており、町年寄の町触集の信頼度の方が奉行所のものより高かった。今、ほかでもないその町方の町触記録の集成である『江戸町触集成』に見えない町触が、評定所で編集された『御触書天保集成』にのみ見えるという状況にあるが、この法令は町触されなかった法令を参照引用してしまっており、この年の京伝・蔦屋の動きまで考えに入れたとき、町触の実施を断念し、町方に知られることのなかった法令と考えるのが最も合理的である。

大塩平八郎物実録の展開

―『狂乱太平記』の以前と以後―

本発表では、大塩平八郎の乱を題材とした「大塩平八郎物実録」の諸本を取り上げる。大塩平八郎物実録に関しては、中村幸彦氏が『天満水滸伝』に注目して、その大まかな全体像を提示している。中村氏によれば、大塩平八郎物実録は『浪花筆記』『天保水滸伝』系統と『太平鑑』『天保太平記』系統が存在し、この二系統が『天満水滸伝』に収斂したと言う。

しかし今回、発表者が改めて大塩平八郎物実録の諸本を調査検討した結果、従来の説とは異なる結論に至った。すなわち、大塩平八郎物実録は、『鹽平勢衰記』『天保浪花実録』（いずれも早稲田大学中央図書館蔵）といった初期の大塩平八郎物実録の写本から、嘉永二年写『狂乱太平記』（東京大学付属総合図書館蔵）に至るまでの間に物語の中心となる内容が確立される。そして、この『狂乱太平記』から『新編 天保太平記』（国文学研究資料館所蔵三井文庫旧蔵資料）と『天保浪花断』（大阪市立図書館蔵）がそれぞれ派生していき、最終的に『天保浪花断』が今古実録版『天満水滸伝』へと発展していくのである。

本発表では、天保八年の事件発生から、明治十七年『今古実録』シリーズ収録までの間に、大塩平八郎物実録が内容面でのどのような発展を遂げたのか、その全体像を明らかにする。同時に、大塩平八郎物実録の中で描かれた、大塩平八郎の人物像についても言及したい。

太閤記物実録の展開を辿る

—『真書太閤記』から『太閤真蹟記』へ—

北海道大学（院） 竹内 洪介

豊臣秀吉の事績を扱う太閤記物実録のうち、『太閤真蹟記』・『真書太閤記』については、従来『太閤真蹟記』が『真書太閤記』に先行するとされてきた。一方、名称からして『真書太閤記』は『重修真書太閤記』に先行し、内容的にも相違が想定されるものの、『太閤真蹟記』も併せて三書が同一のものと考えられることもあった。そこで本発表では改めてこの三書を区別し、『真書太閤記』から『太閤真蹟記』への成立過程を示す。

成立の順序としては、長野電波技術研究所蔵『太閤真蹟記』跋文・架蔵『太閤真蹟記』序文において、『真書太閤記』『太閤真蹟記』が区別され、『真書太閤記』から『太閤真蹟記』への展開が示されていることが注目される。これに基づいて『真書太閤記』『太閤真蹟記』両書の諸本を比較すると、第十編では全体に亘って取り扱う事件に明らかな相違があり、甲乙二系統に大別でき、さらにこの二系統には前後関係も認められる。

なお、甲本系統は『重修真書太閤記』、乙本系統は読本『絵本太閤記』の底本に採用されたと見られる。甲本系統は『重修真書太閤記』の名称からも、『真書太閤記』を基として展開したものと考えられ、乙本系統は『絵本太閤記』の版心に「真蹟記」とあり、『太閤真蹟記』を基にしたものと推測される（因みに、『絵本太閤記』の絶版以後乙本系統は版行されない）。

以上より、甲本『真書太閤記』から乙本『太閤真蹟記』への成立過程を示し、太閤記物実録の展開を把握していく。

瀬川采女説話の受容と展開

—妻・菊の貞女性と好色性を中心に—

大阪大学（院） 岡部 祐佳

瀬川采女とその妻・菊の朝鮮出兵をめぐる説話は、原典と目される小瀬甫庵『太閤記』（寛永二年序）以来、浮世草子や演劇などに取り入れられてきた。朝鮮へ出征した夫に送った書簡が偶然秀吉の台覧を得たことで夫の帰国が叶うという本説話は、書簡を中核としたいわば「書簡説話」とでもいえるべきものであり、その受容と展開においても中心となるのは書簡とその書き手である菊のあり方であったといえよう。

『太閤記』評文で「心正しく物まめやかに、夫を思ふに偽なかりしかば」とされて以降、殿村篠斎宛馬琴書簡（文政十一年十月六日付）に「実録の瀬川采女の事も、その妻菊の貞操ヲ専文ニ、世俗申伝候」とある通り、菊には貞女というイメージが付与されてきた。しかしその一方で、例えば伴信友『中外経緯伝草稿』（天保六年識）において「たはけたる書」を書いた「色ふかきうまれのまご、ろ」の持ち主と評されるなど、当時本説話および菊に対しては批判的な見方も存在していた。菊のこのような二面性は、恋物語の叙述に利用されると同時に実用性を備え教育的意義をも持ち合わせていた近世文芸における「艶書」のあり方を反映しているのではなからうか。

本発表では以上のような見通しの元、菊のイメージについて貞女性と好色性を中心に整理することで、本説話の近世期における受容と展開の一端を明らかにする。

清正像の生成と展開

—宇佐美定祐『朝鮮征伐記』をめぐって—

防衛大学校 井 上 泰 至

文禄・慶長の役における加藤清正像が、蛇の目紋の長烏帽子形兜・片鎌槍・南無妙法蓮華經の髭題目の旗等に象徴されるようになるのは、十九世初頭の演劇や『絵本太閤記』あたりからだということがわかっている（佐藤悟「『絵本太閤記』と浮世絵」日韓国際シンポジウム「太閤記をめぐる諸問題」二〇二五年三月）。では、そうしたイメージに集約される朝鮮での清正像の源流はどこに求めればいいのか。

紀州藩軍学者宇佐美定祐『朝鮮征伐記』（寛文五年序）は、堀正意『朝鮮征伐記』を元にしつつ、『清正記』『続撰清正記』『加藤清正高麗陳働之覚書』等によって「増補」を加えた、典型的な寛文期の編纂物写本軍書であり、後の刊行軍書・実録にも影響を与えたとおぼしい。

本発表では、①本書の諸本の整理、②原題が「増補朝鮮征伐記」であった可能性、③紀州初代藩主徳川頼宣の軍学・軍書への嗜好を受けて、宇佐美が諸資料を蒐集・糾合し、軍学と娯楽の双方の観点から「増補」を行っていった事実等を踏まえつつ、朝鮮二王子の捕縛・オランカイ侵攻・地震加藤・蔚山の籠城戦等、一連の清正説話が、ほぼ本書によって定位した実態と、『加藤清正高麗陳働之覚書』の存在が、「増補」の眼目であったことを報告する。

加えて、その影響関係の中で、注目すべき問題である、八幡信仰の投影とその意味についても、私見を述べる。

重要

〈事務局からのお願い〉

日本近世文学会会員各位

先般よりお知らせのとおり、本学会では、大会案内（プログラム・研究発表要旨）・出欠葉書・大会参加費等払込みの電子化を目指しています。ぜひご協力下さい。日本近世文学会ホームページ「電子化ご協力のお願い」にてご登録賜りますと幸いです。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

2019年8月19日

日本近世文学会事務局代表

津田眞弓

MEMO

会場へのアクセス



サテライトキャンパスひろしま (広島県民文化センター 5階)

〒730-0051 広島市中区大手町 1-5-3

TEL : 082-258-3131 FAX : 082-258-3010

【JR 広島駅から】

◆路面電車(広島駅南口より)約15分

- 広島港行(1号線)
→「本通り」下車、徒歩約3分
- 広島宮島口行(2号線)
江波行(6号線)
→「紙屋町西」下車、徒歩約3分

◆バス(広島駅南口より)約15分

- 3号線(のりば番号②)
- 21-1・21-2号線(のりば番号③)
- 24号線(のりば番号④)
→「本通り」下車、徒歩約3分
- 71号線(のりば番号⑩)
→「紙屋町(エディオン新館前)」下車、
徒歩約3分

【広島空港から】

◆リムジンバス 約60分

- 「広島バスセンター行」
→「広島バスセンター」下車、徒歩約3分

【アストラムライン本通り駅から】

下車、徒歩 約3分

※図書展示会場「頼山陽史跡資料館」

:大会会場より徒歩約7分

※懇親会会場「ANAクラウンプラザホテル」

:大会会場より徒歩約10分

→詳細な地図は当日配布します。